



カーテンコールで投げられた花束を拾う
ドミンゴ

第2幕 ヴィオレッタ(ディアナ・ダムラウ)、
ジェルモン(ブラシド・ドミンゴ)、アルフレード
の妹(黙役)

第2幕 ヴィオレッタ(ディアナ・
ダムラウ)、ジェルモン(ブラシド・
ドミンゴ)

第2幕 アルフレード(チャールス・カスト
ロノーヴォ)、ジェルモン(ブラシド・ドミ
ンゴ)、アルフレードの妹(黙役)

第3幕 ヴィオレッタ(ディアナ・ダムラウ)、アルフレード(チャールス・カストロノーヴォ)、
ジェルモン(ブラシド・ドミンゴ)、グランヴィル医師(クリストフ・クロレック)

オペラ史上に名を刻む スター歌手を体験する意義

中 東生(音楽ジャーナリスト)

ミュンヘン・オペラ・フェスティバル『椿姫』

6月27日 バイエルン国立歌劇場 所見

今年もミュンヘン・オペラ・フェスティバルが6月24日から始まった。そのプログラムの中でまず惹かれた『椿姫』を6月27日に鑑賞した。

惹かれた理由のひとつは、今まで何度もチャンス逃していたソーニャ・ヨンチエーヴァのヴィオレッタを生で聴けることだったが、またキャンセルとなり、ディアナ・ダムラウが歌った。アルフレードは堅実な歌唱を聴かせるチャールス・カストロノーヴォなので安心だし、最近日本でもおなじみのアンドレア・バッティストーニが、ドイツで定番オペラをどう指揮するのか知りたかった。そして究極はブラシド・ドミンゴの歌うジェルモンだ。すっかりバリトンとして定着したドミンゴだが、「なぜテノールの声でバリトンの役を奪うのか」と嘆く某大御所歌手に共感するものの、一度は生で体験してきたかった。

おざなりな拍手で迎えられたバッティストーニは、ゆっくりしたテンポで保守的に序曲を始めた。小節線をしつかりそろえてはいるが、フレーズをあまり膨らませられず、平坦だ。しっかりとメロディラインを引っぱっていかず、その場に置き去りにする不満感が、速いテンポでの巧妙な統率力で次第に消され、最後は大きな拍手で迎えられるという変化が肌で感じられて興味深かった。

ダムラウは数年前のヴィオレッタよりドラマティックに挑み、胸声も使い

過ぎて、実際に数カ所声が割れたが、気にせず突き進んだ。細やかでありながらドイツ的解釈で創り上げたヴィオレッタは違和感を否めない部分もあるが、終幕のピアノニッシモなど、声の柔軟性を生かした歌唱は群を抜いている。カストロノーヴォは脇役と聴き間違えるほど華のない声で始めたが、レガートを大切にしたり丁寧な歌い方で、3人の中で一番安定していた。

そしてドミンゴが登場すると周りの空気が張りつめた。第一声はジェルモンの威厳のかけらもないテノール声に気が抜けた。しかし歌い進んでいくと、上品で人好しなジェルモン像が浮き出てくる。そして勤勉さを感じさせる発声技術で、76歳とは思えない歌唱を聴かせた。「指揮やバリトンの領域を荒らす」との批判もあるが、幼少期から両親とサルスエラのツアーに出ているドミンゴは、オペラに継続するために、役割やジャンルを越えて開かれるすべての道を、惜しまぬ努力で掌握し全うすることに意義を見出しているのだろう。オペラ歌手黄金時代最後のスターを体験することは、それだけでかけがえないものなのだと実感した。

2017年6月27、29日
バイエルン国立歌劇場
作曲/ジュゼッペ・ヴェルディ
指揮/アンドレア・バッティストーニ
演出/ギンター・クレーマー
合唱/バイエルン国立歌劇場合唱団
管弦楽/バイエルン国立歌劇場管
弦楽団